



大島能楽堂

大島文恵さん

今回は、柳土井工業の土井雄蔵さんからご紹介いただいた大島能楽堂(福山市光南町二二二)大島文恵さんです。

：仕事と内容

私は、能楽の喜多流大島家で、四代目・政允の次女として生まれました。男性社会といわれる能の世界ですが、三歳で初舞台を踏んで以来、お稽古を重ね、社会人の体験学習や、小学校の総合学習

伝統文化「能」が

日常によりそう瞬間づくり

の授業に出向くなど、能の普及活動にも努めています。

：能とは

もともと能は、室町時代に足利義満の庇護のもと、観阿弥・世阿弥親子によって大成された舞台芸能ですが、人間ならではの悲哀や苦しみなど、シリアスなテーマで描かれたものが多く、狂言とよき対を為して発展してきました。

約二百ある能の曲では、たくさんの神様が登場し、日本人の自然信仰のなかで、独自の文化を花開かせたことを同わせるものもありますし、「源氏物語」に登場する女性のひとりを題材に、文学をまた違った目線からみることができるものもあります。そういった歴史や文化に思いを馳せるのも楽しい瞬間です。

さらに能は、音楽にあわせて演じるミュージカルのようなもので、鑑賞して楽しむだけでなく、武家の式楽として、また一般の人のたしなみとしても発展してきました。例えば、歌の部分「謡曲」や舞の部分「仕舞」といった能のエッセンスを身につけるといえるのです。

：地域に根付く

福山藩水野家の時代から能は盛んに演

じられていましたが、それまでの能楽師の家が途絶えたため、福山藩士であった初代・大島七太郎が明治維新後に跡を継ぎました。

東京に拠点を置く能楽師が多い中、福山で生まれた大島家が地域に根ざしてきたのは、城下町という土地柄、能を愛してくれる土壌が育っていたことがまず挙げられます。そして、それ以上に私の祖先も福山を愛してきました。

曾祖父にあたる二代目寿太郎は、大正六年に能楽「頼浦」を創作し演能していますし、三代目・祖父の久見は、「戦後の焼け野原に活力を与えたい、自分には能しかない」と力を注いだそうです。昭和四十六年には、個人所有のものとして、中国四国地方唯一の能楽堂を建立し、年に四・五回の定期公演をするなどして今に至っております。

：将来の展望

一般に日本独自の伝統文化は今、非日常の文化になっっているように感じられます。私はこれを地域の日常生活に寄り添うよう、今後も一層の普及に努めたいと考えています。

具体的には、小学校の授業と稽古を通して、能が子どもたちの日常会話に登場するよう伝え、家庭でも普段話題になり、祖父母世代にも輪が広がることを願っています。舞台を成し遂げた子どもたちの笑顔を見るとき、私にとっても、触れ合えた、一緒にやれたと充実する瞬間でもあるのです。